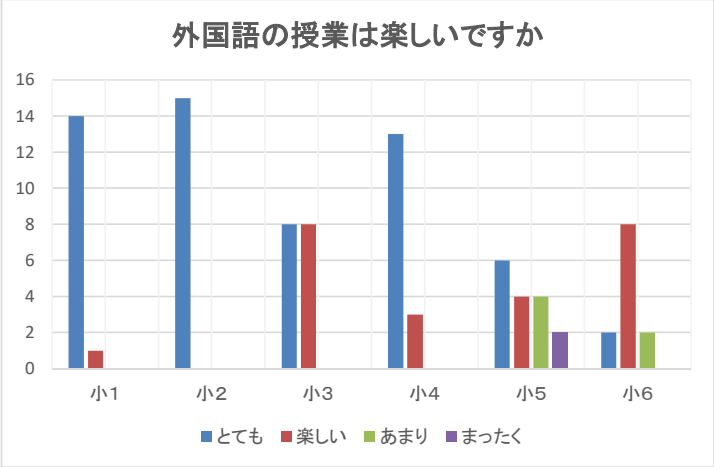
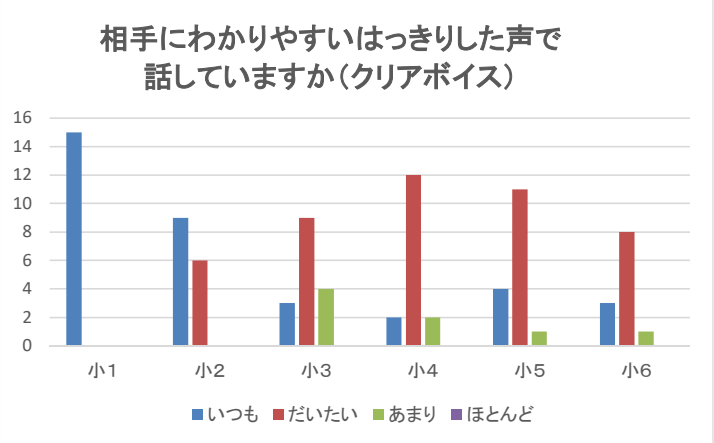
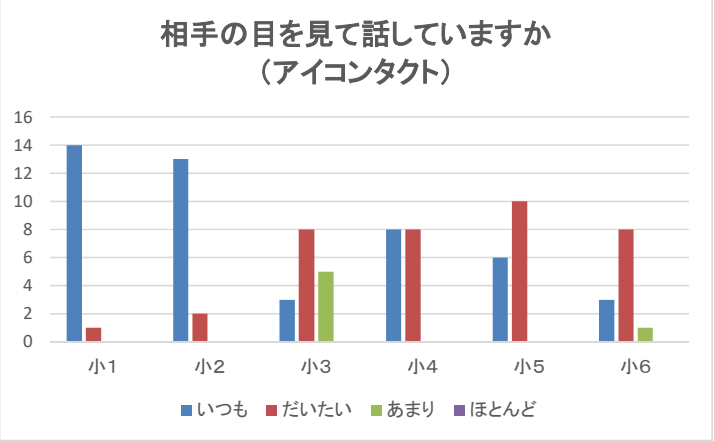
令和7年度外国語実施状況調査結果（1年生～6年生全員調査）



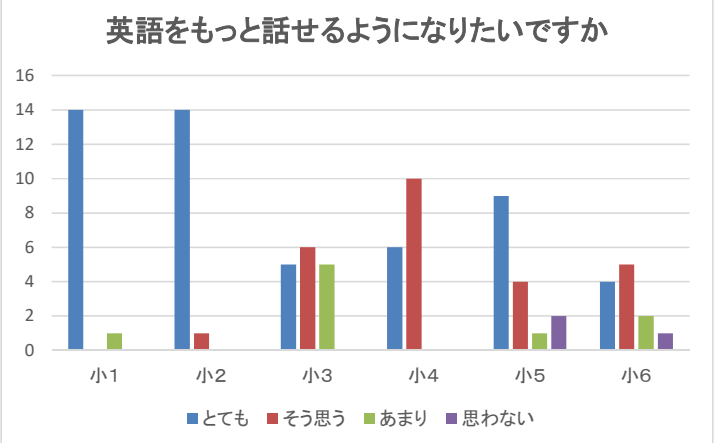
「とても楽しい」「楽しい」（ア・イ）と答えた児童が非常に多く（90名中82名）、概ね良好な結果であった。特に低学年（1・2年生）および4年生においては全員がポジティブな回答をしている。
一方で、高学年（5・6年生）になると評価がやや低下し、5年生では「あまり」「まったく」（ウ・エ）と答えた児童が計6名見られた。低学年の頃の「英語に親しむ楽しさ」や意欲を保ち続けられるよう、高学年においても興味・関心を持続させる授業展開や配慮を



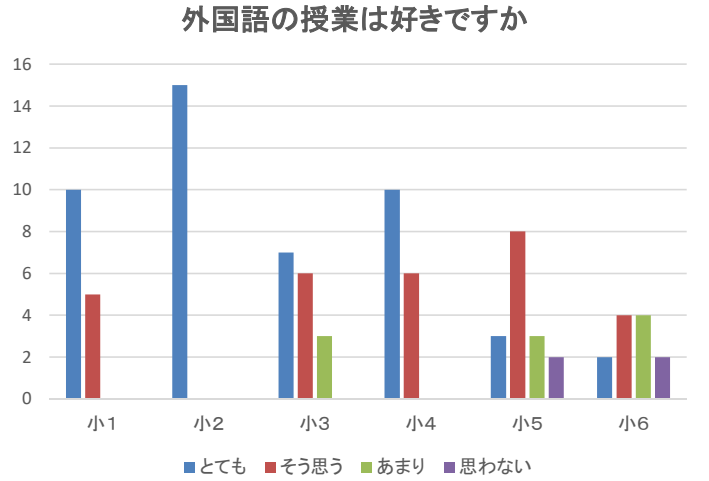
全体的に「いつも」「だいたい」（ア・イ）と回答した児童が多く（90名中82名）、概ね良好な結果であった。はっきりと分かりやすい声で伝える（クリアボイス）姿勢は、外国語活動にとどまらず、全教科・日常のコミュニケーションの根幹となる大切な要素である。3年生や5～6年生に一部「あまり」（ウ）と答える児童も見られるため、外国語の授業だけでなく全校的な取り組みとして、相手に届く声での発信（クリアボイス）を継続して意識させていきたい。



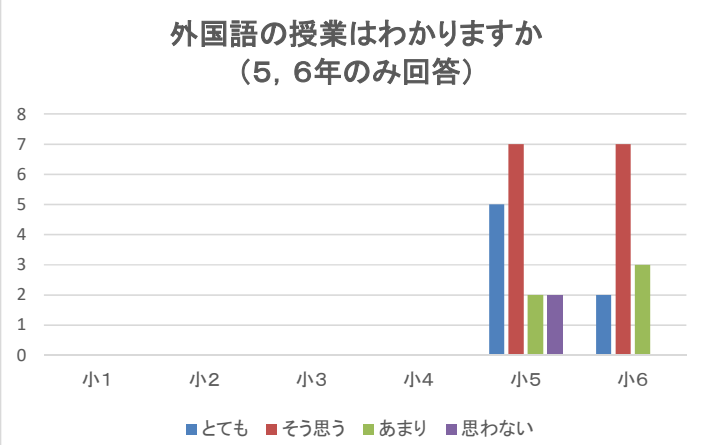
全体的に「とてもそう思う」「そう思う」（ア・イ）と答えた児童が多く（90名中78名）、児童の学習意欲の高さがうかがえる。特に1・2年生ではほぼ全員が高い意欲を示している。一方で、5・6年生においては「あまり思わない」「思わない」（ウ・エ）と答えた児童が計6名おり、学年が上がるにつれて苦手意識や伸び悩みを感じる児童が出てきている。児童一人一人が「自分の英語が伝わった」という実感や成就感を味わえる場面を増やし、関心と向上心を維持できるよう支援し



全体的に「とてもそう思う」「そう思う」（ア・イ）と答えた児童が多く（90名中78名）、児童の学習意欲の高さがうかがえる。特に1・2年生ではほぼ全員が高い意欲を示している。
一方で、5・6年生においては「あまり思わない」「思わない」（ウ・エ）と答えた児童が計6名おり、学年が上がるにつれて苦手意識や伸び悩みを感じる児童が出てきている。児童一人一人が「自分の英語が伝わった」という実感や成就感を味わえる場面を増やし、関心と向上心を維持できるよう支援していく。



全体的に「とても好き」「好き」（ア・イ）と答えた児童が大多数（90名中76名）であり、概ね良好な結果である。2年生においては全員が「とても好き」と回答しており、低学年からの外国語活動導入の成果が表れている。
一方で、5・6年生では「あまり好きではない」「好きではない」（ウ・エ）と答えた児童が計11名（5年生5名、6年生6名）見られる。高学年の段階で生じやすい躓きやつまずきに対し、スモールステップで「できた・分かった」体験を重ねさせ、自信を持って楽しく参加できるよう配慮と支援を徹底したい。



5・6年生ともに「とてもわかる」「わかる」（ア・イ）と答えた児童が多数派であり（28名中21名）、概ね良好な理解度を示している。しかし、5年生で4名、6年生で3名の児童が「あまりわからない」「わからない」（ウ・エ）と回答している。単元や活動内容の難易度が上がる時期であるため、児童の学習状況や躓きをきめ細かく見取り、個に応じた指導やほめる関わりを通して、確かな理解と達成感を持たせていきたい。

【全体考察】今年度の調査結果においても、全体として肯定的な回答が多く、概ね良好な教育成果が確認できた。特に低学年からの外国語活動においては、幼保小の円滑な接続や家庭での前向きな話題化など、学校運営協議会（外部評価）からも高い評価を得ている。英語専科、ALT、学級担任が連携し、「わかる」「できた」「伝わった」を実感できる楽しい授業づくりに努めてきた成果である。しかしながら、高学年（特に5・6年生）に進むにつれて、内容の高度化や恥ずかしさ等から苦手意識を持ったり、学ぶ意欲が低下したりする児童が一部見受けられる。今後は、高学年における指導内容・方法の工夫やきめ細やかな見取りを行い、単に「楽しむ」段階から「できる・伝わる喜び」を感じる学びへと深化させ、全校児童が生き生きと意欲的に取り組める外国語教育を推進していきたい。

【学校関係者評価】
〇接続低学年の満足度が非常に高く、家庭でも楽しそうに話している様子で、1年からの導入は大変意義深い。
〇目を見て（アイコンタクト）大きな声で話す姿勢（クリアボイス）が定着しつつあり、日常のコミュニケーション力向上にも効果を感じる。
〇高学年で苦手意識を持つ児童が見られるため、他校や地域との交流なども含め、自信と達成感が持てる工夫に期待したい。